

デジタルアーカイブ産学官フォーラム（第4回）
ジャパンサーチの挑戦 ～ポストコロナ社会とデジタルアーカイブ～

日 時：令和2年9月10日（木）15:00-17:00

開催方法：オンラインイベント形式により実施

【プログラム】

1、ジャパンサーチ正式版の紹介

- (1) 知的財産推進計画 2020 におけるジャパンサーチの位置づけ
- (2) ジャパンサーチ正式版の機能紹介

2、パネルディスカッション

【議事録】

○司会 皆様、お待たせいたしました。ただいまより「デジタルアーカイブ産学官フォーラム（第4回） ジャパンサーチの挑戦 ～ポストコロナ社会とデジタルアーカイブ～」を開催いたします。

ジャパンサーチは、8月25日に正式版が公開されました。本日は、その記念フォーラムとなります。

司会は、私、国立国会図書館電子情報部主任司書、徳原が務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

本イベントのスライドの撮影や録音、録画は、基本的に自由ですが、登壇者から部分的に録音及び録画不可のお申し出があった場合は、それに従ってください。

本イベントの発表資料は、ジャパンサーチのトップページ、お知らせに掲載しております。また、イベント終了後に内閣府のデジタルアーカイブ産学官フォーラムのページにも記載いたします。

イベント中に御質問等ございましたら、Q&Aの機能を使いまして、御質問ください。事務局で答えられる範囲でお答えいたします。

本イベントについて、SNS等に投稿する際は、ハッシュタグ「#ジャパンサーチ」「#デジタルアーカイブ産学官フォーラム」をお使いください。

それでは、開会に当たりまして、主催者を代表いたしまして、内閣府副大臣、平将明より、御挨拶申し上げます。

○平副大臣 ただいま御紹介いただきました、知的財産戦略担当副大臣の平将明でございます。

4回目を迎える当フォーラムでございますが、前回は新型コロナの影響で中止となってしまいました。今回はオンラインという新しい形で開催できたことをうれしく思っております。

また、オンラインで開催することによりまして、申込者数は、前回の4倍強となりました。国内は全国各地から、また、海外はアメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ等から700名以上の皆様にお申込みをいただいております。

ジャパンサーチは、8月25日に正式版を公開しました。既に御利用いただいている方も多いたと思いますが、多くの関係者に御協力をいただき、公開時現在で23のアーカイブ機関と連携し、100のデータベース、2100万件ものメタデータが検索可能となっております。

御承知のとおり、今般の新型コロナウイルスの影響により、職場においてテレワークが普及し、教育現場では遠隔教育が広がり、家庭内でも動画、静止画、ゲーム等、様々なエンターテインメントコンテンツを楽しむ機会が増え、いわゆるデジタルアーカイブ資源のニーズは、ますます高まっていると言えます。

ジャパンサーチは、これらの需要に対して、デジタルコンテンツにリーチする有力な手段として機能することが期待をされております。

政府といたしましても、今年5月に安倍総理を本部長とする知的財産戦略本部で決定をされました、知的財産推進計画2020において、デジタルアーカイブ社会の実現を知的財産戦略の一環として位置づけ、その中でジャパンサーチは、中核的な役割を担う重要な施策として、さらなる利便性の向上と持続可能な運営体制の構築を盛り込んでいるところでございます。

デジタルコンテンツにリーチする手段にとどまらず、たどり着いた先のデジタルコンテンツを利活用することで、新たなデジタルコンテンツが生成され、さらに新規ユーザーがそのコンテンツを利活用していくコンテンツ・クリエーション・エコシステムの構築も重要であると考えております。その利用分野は、教育や学術研究、エンターテインメントのみならず、観光、地域活性化、防災、ヘルスケア、ビジネスなど、幅広く利活用されていくものと期待をしております。

本日のフォーラムでは、コロナ禍において、デジタルアーカイブ社会を推進するために、ジャパンサーチに求められている役割等について、国内、海外の視点から考えてみたいと思っております。ジャパンサーチは、これからも連携を拡大し、進化を続けてまいります。

本日、この配信を御覧いただいている皆様には、ジャパンサーチへの御意見、御要望をお寄せいただき、皆様でジャパンサーチを進化させていただきたいと思っております。

本日は、最後までゆっくりとお楽しみください。御参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

○司会 ありがとうございます。

続きまして、国立情報学研究所教授、高野明彦より、ジャパンサーチの運営主体である実務者検討委員会の座長として、御挨拶申し上げます。よろしく願いいたします。

○高野教授 国立情報学研究所の高野です。

今日は、ジャパンサーチの開発推進を担当しているデジタルアーカイブジャパン推進委員会の下に置かれた実務者検討委員会の座長としてご挨拶します。

我々が、ジャパンサーチ、あるいはそれを取り巻く活動でどういうことを実現したいと考えているのかについてお話ししたいと思います。

私たちの社会は、100年、200年、あるいはもっと以前から文化の記録をいろいろな形で引き継いできています。日本は割合それがうまく機能している国として知られています。お寺や古い蔵の中に思いがけない記録が残っていたり、家族の記録が思わぬところから出てきたりということで、テレビ番組にもなっていますが、かなり掘り起こしがいのある国だと思います。

現在、私たちが学習や趣味の追求に普通にアクセス可能な情報はどのような状況にあるかと考えてみますと、意外と日本の古い伝統や、そういう厚みのある記憶になかなか届いていない。私たちはSNSのサービス上できれいな写真を見つけたことや、古いお寺に行ってきたという情報は交換するのですが、非常に表層的で、そこから一歩深めようとしても、SNSの投稿から先にはなかなか入れないというのが現実です。

それらは、現在、GAFAといわれているような海外の価値観でドライブされているプラットフォームに強く依存しています。この環境下にあって、最近、デジタルトランスフォーメーション（DX）が大切だとよく言われますけれども、私たちの一番最初のスタートも、デジタルの技術を私たちが日常的にやりたいことにうまく振り向けて、簡単にやれることはやれるようにしようではないかということでした。

推進委員会には、これまで一つのテーブルに集うことが少なかった公文書館、図書館、美術館、博物館を始め、大学や地域で各種の発信に関わっている方々、普通は一緒に一つの問題を議論する機会がなかった多様な方々に集まっています。偉い方々だけではなく、実際に自分たちが発信してきたという実務者に集まっています。そこで上がった共通の問題を解決できるルールづくりについて議論しました。それぞれの活動が無駄にならずに横につながっていくような仕組みはできないかということで、ガイドラインをつくることに注力しました。

今、ホームページに、推進委員会の3カ年の報告書を載せていますが、そこに幾つかのガイドラインを示して、それに従って進めていけば、自然と統一感のあるものになる、あるいは隣の活動とつながり出すと考えています。

普通、政府の委員会は、ガイドラインを出しておしまいというのが割と多くて、それがどのくらい採用されたかには頓着しないというのが普通かもしれませんが、この委員会では、むしろどれくらいそれを本当に使ってもらえるかを考えました。ガイドラインと同時に評価尺度のようなものを用意して、例えばレーダーチャートで、この組織はこういうところが弱くて、ここがすごく強いということが分かるようにしています。それぞれの組織で自己採点ができて、自分たちの活動をバランスよく発展させていくことに寄与したいと考えています。

今回、ジャパンサーチをつくった目的の一つは、それぞれ機関の活動がどのくらいのところまで来たか、国全体としてどのくらい進んでいるのかということを見る方法を提供す

ることです。ジャパンサーチを見れば、日本の参加館は大体どのくらいの水準にあるかがわかります。あるいは新しい組織も、そこに参加することによって、自分たちの活動がどのあたりに位置づけられるのかが分かる場所になっています。

今回、国会図書館では、従来のシステム開発調達方法に捉われず、図書館内のエンジニアにも積極的に参加してもらえやり方で、作品と呼べる野心的なシステムができ上がったと感じています。今日、皆さんから、このイベントを通じていろいろな要望をいただきますと、それをどんどん取り込んでいける機動力のあるシステムになっています。ぜひ思いのたけをぶつけていただいて、私たちの発展を応援していただければと思います。

今日は、どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

それでは、これより第1部、ジャパンサーチ正式版の紹介に移らせていただきます。

まず知的財産推進計画2020におけるジャパンサーチの位置づけについて、内閣府知的財産戦略推進事務局参事官、田淵エルガより、御説明いたします。お願いいたします。

1、ジャパンサーチ正式版の紹介

（1）知的財産推進計画 2020 におけるジャパンサーチの位置づけ

○田淵参事官 内閣府知財事務局の田淵と申します。

知財事務局でデジタルアーカイブ推進政策の政府全体の取りまとめを行っていますので、本日、政府全体の取組におけるジャパンサーチの位置づけを中心に、御紹介させていただきますと思います。

知財事務局では、デジタルアーカイブの推進を従来より重要な施策の一つとして位置づけてきております。知財事務局は、総理をヘッドにする知財本部という組織の下にある事務局なのですが、その知財本部で、毎年、知的財産推進計画というものを策定しています。毎年、デジタルアーカイブについては、具体的な施策や今後進めるべき方向性について、盛り込まれております。

今年度の知財計画は、5月27日に決定されたのですが、特色としては、コロナを受けた章が新たに加わったということがあります。それが緑の部分でお示ししている第2章の部分です。コロナを受けまして、社会全体のDXの加速や、無形資産からの価値創出、そこには文化産業等の支援も含まれます。また、知的財産の保護と利用のバランス。これらはいずれもデジタルアーカイブ施策とも非常に深く関わる動きとなっております。

デジタルアーカイブにつきましては、具体的に第5章の「コンテンツ・クリエーション・エコシステム」の中の一つとして、位置づけられております。コンテンツが創作され、それが利活用され、さらにまた新たなコンテンツが創作されるという、良い循環をつくっていく上で基盤となる政策として、デジタルアーカイブは位置づけられています。

真ん中の辺に下線で引いてあります、「社会が持つ知、文化的・歴史的資源を効率的に共有し、未来に伝え、現在のみならず将来の知的活動を支える基盤的役割を持っている」

とありますが、そういう意味を込めてのことでございます。

新型コロナの影響によって、テレワークのニーズも急速に高まっております。自宅滞在時間の増加に伴って、デジタルアーカイブ資源の需要が大変高まっております。遠隔での様々な活動を可能とする社会の基盤としてのデジタルアーカイブの構築や、デジタル技術を用いて、コンテンツを利活用できる環境を整備することの重要性をさらに高めていると言えます。様々な分野の創作活動を支える基盤となるデジタルアーカイブ社会の実現を図っていく必要性が、以前にも増して高まっていると言えらると思います。

その中でも、本日は、ジャパンサーチの周知イベントという側面もあると思うのですが、ジャパンサーチは、中核的な取組の一つとして位置づけられております。多様なデジタルコンテンツが教育、学術、観光、地域活性化、防災、ヘルスケア、ビジネスなど、様々な分野で利活用されることが期待されております。

知財計画には、毎年、具体的にそれぞれの役所等が何をするのかということが書き込まれているのですが、今後、取り組むべきこととして、多言語化とか、あるいはメディア芸術の保存、情報拠点の整備、全国の大学等研究機関の人文情報集約を継続してそれらをジャパンサーチと連携するようなことも盛り込まれております。

また、コロナで図書館等が閉まっているような状況がしばらく続いたこともありまして、図書館等が保有する資料へのアクセスを容易化するための議論、そういったものも政府の中で、今、始まっているところでございます。

このスライドは、これまで申し上げたところを図示化したものです。サイバー空間とフィジカル空間をうまく結びつけて、コンテンツやデータの距離・時間・費用・言語の制約のない共有を図るための基盤として、デジタルアーカイブジャパンを推進していく必要があるということでございます。

デジタルアーカイブは一義的には、教育とか、学術研究の場面で利活用されることが多いと思うのですが、それにとどまらず、観光、地域活性化、防災、ヘルスケア、ビジネスといった、様々な分野での活用が期待されるところであります。

先ほど高野座長からも御紹介がありましたけれども、デジタルアーカイブジャパン推進体制は、推進委員会がありまして、関係省庁とか、公的アーカイブ機関の代表者から成っております。その下に実務者検討委員会があるところでございます。実務者検討委員会で3年間にわたりまして、様々な課題について検討を進めてまいりまして、このたび報告書をまとめたところでございます。

また、報告書の補足文書として、幾つかガイドラインがついているのですが、特に昨年はデジタルアーカイブのための長期保存ガイドラインを公開しました。長期保存というのは、非常に大きな課題として挙げられているところでございますけれども、そのためのガイドラインがまとめられております。

デジタルアーカイブにおける望ましい二次利用条件表示の在り方につきましても、これは主にアーカイブ機関が作成したデジタルコンテンツにおいて生じ得る著作権等の権利に

ついて、一定程度標準化された分かりやすい利用条件を表示するためのガイドラインでございます。また、高野座長からも御紹介がありました、デジタルアーカイブアセスメントツールという、デジタルアーカイブ化の活動を自己点検し、評価をするためのシートもついています。これら全て知的財産戦略本部のホームページに掲載されておりますので、皆様におかれましても、ぜひ御覧になっていただければと思います。

最後に、デジタルアーカイブの中で、ジャパンサーチが果たす役割ですけれども、我が国の多様なコンテンツのメタデータをまとめて検索できる分野横断型統合ポータルサイトとして、重要な役割が期待されております。デジタルアーカイブジャパン推進政策における基本戦略の一つでありますし、単なる検索ツールではなく、我が国の知財戦略の一環として、これからも周知や拡大等を国立国会図書館や他のアーカイブ機関とも連携して、図っていきたいと思います。

以上、簡単ではございますが、知財推進計画におけるジャパンサーチの位置づけに関する説明とさせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

続きまして、ジャパンサーチ正式版の機能紹介と題し、国立国会図書館電子情報部電子情報企画課課長補佐、向井紀子より、御説明いたします。

（２）ジャパンサーチ正式版の機能紹介

○向井氏 国立国会図書館の向井と申します。

この発表では、８月２５日に公開されたジャパンサーチ正式版につきまして、最初に概要を御説明し、後半は具体的な機能の紹介を中心にお話ししてまいります。

ジャパンサーチは、我が国が保有する豊かな学術的、文化的、社会的資産である様々な分野のデジタルアーカイブと連携し、デジタルコンテンツそのものではなく、そのメタデータを集約して、利活用しやすい形で提供する仕組みです。

メタデータとは、図書館で言えば書誌データ、博物館や美術館で言えば目録データが該当いたします。ジャパンサーチは、メタデータを自由に二次利用できる条件で流通させることで、コンテンツそのものの利活用を促進することを目指しております。

これはジャパンサーチに関わる機関の役割を整理した図です。

図の中ほどに青枠で「ジャパンサーチ」とあります。ジャパンサーチは、図の上にあります書籍、文化財など、様々な分野のデジタルアーカイブと連携して、そのメタデータを集約し、さらに活用しやすい形にして、流通を促進します。

これにより、図の下に「活用者層」として示しておりますとおり、例えば教育や観光、ビジネスなどで、デジタルコンテンツが利活用されることを期待しております。

国立国会図書館は、実務者検討委員会で決定される方針の下で、ジャパンサーチのシステム運用と連携調整を担当しています。また、当館は、書籍などの分野のつなぎ役として、全国の図書館等のメタデータを国立国会図書館サーチで集約し、ジャパンサーチに提供す

ることも行っております。

こちらが正式版を公開した8月25日時点の連携状況の一覧です。

つなぎ役である23の機関、108のデータベースと連携しており、およそ2,100万件のメタデータが検索可能です。本日、9月10日の時点では、さらに一つ、データベースの連携が追加されております。試験版を公開した2019年2月の時点では、連携機関は10、データベースは36、メタデータはおよそ1,700万件でしたので、1年半ほどの間に連携機関やデータベースは倍以上に増えたと言えます。

それでは、ジャパンサーチの連携方針について、見てまいります。

ジャパンサーチがどのようなデジタルアーカイブと、どのように連携するかの方針は、実務者検討委員会が定めています。

原則として、ジャパンサーチとの連携は、その分野、その地域のつなぎ役がメタデータを取りまとめることになっていきます。例えば当館のほか、文化遺産オンラインの文化庁、サイエンスミュージアムネットの国立科学博物館などがつなぎ役に該当します。

ただし、つなぎ役がない分野や地域については、実務者検討委員会がスライドの緑色の枠で示した条件に照らして、それぞれのアーカイブ機関と直接連携するかを検討いたします。

こちらのスライドの赤枠で示しましたとおり、つなぎ役には様々な役割が期待されています。ただし、一つの機関が全ての役割を果たす必要はなく、それぞれの分野、地域の中で複数の機関が協力して達成してよいとされています。

今後、ジャパンサーチを充実させていくに当たって、つなぎ役の存在はとても大切です。つなぎ役の役割については、今後、実務者検討委員会でのさらなる議論が必要だと考えております。

こちらのスライドは、ジャパンサーチのメタデータの連携と活用までの流れをまとめた図です。

つなぎ役やアーカイブ機関は、データベースが持っているオリジナルの形のままのメタデータをジャパンサーチに登録することができます。これはジャパンサーチとの連携に必要な手間を小さくする工夫の一つです。

ジャパンサーチでは、登録されたメタデータのうち、タイトルや日付、場所などのどの分野でも共通する項目については、追加してラベルを付与します。スライドの中央、共通項目ラベルの付与がこれに当たります。これによって、オリジナルのメタデータの項目を生かしながら、横断的な検索が可能になります。

さらにその後、ジャパンサーチ側で集約したメタデータを利活用のための分野共通メタデータモデルである、ジャパンサーチ利活用スキーマに変換し、APIで提供します。

こうして利用者は、検索やAPI、マイノートなどの各サービスを利用することができます。

今回の正式版に先立ちまして、およそ1年半前の2019年2月に、ジャパンサーチは試験版を公開いたしました。試験版の運用中は、皆様から使い心地などの御意見をいただき、

ここに記載しているような様々な機能改善を行いました。

ここで、試験版当時と比べながら、正式版公開直後のジャパンサーチのアクセス状況について、少し御紹介しておきます。

まず一日当たりの平均ページビューですが、2019年2月から今年7月までの試験版では、2,000ページビューにも達しておらず、かなり少ない状態でした。これが正式版公開後1週間は、1万9,565ページビューと格段に増えておりました。一日当たりの平均ユーザー数も同じく増加しております。海外からも高い関心をお寄せいただきました。

正式版公開直後の御祝儀的な状況ではありますが、このままジャパンサーチへのアクセスが伸びていきますように、努めてまいりたいと考えております。

それでは、ここからジャパンサーチの機能について、少し詳しくお話ししてまいります。

ジャパンサーチには、大きく分けて3種類の機能があります。

一つ目は「探す」、検索機能です。ジャパンサーチは、個性豊かなデータベースと多数連携していますが、オリジナルのメタデータを用いることで、分野の特性を生かした検索機能を提供しております。

二つ目は「楽しむ」、検索せずに楽しむ機能として、ジャパンサーチのコンテンツを解説つきで紹介するギャラリーを用意しています。

三つ目は「活かす」、これはコンテンツの利活用促進の基盤となる機能です。ジャパンサーチが集約したメタデータをほかのアプリケーションで利活用できるAPIを提供するほか、マイノートなどの機能も用意しております。

それでは、3種類の機能のうち、まず検索機能について、紹介いたします。

ジャパンサーチの画面にある窓が横断検索の入り口です。このスライドですと、緑色の枠の部分が該当します。ここからジャパンサーチと連携する全てのデータベースをキーワードで検索できます。

時間と場所のデータは、簡易な正規化処理が施されており、例えば西暦で検索すると、和暦のデータもヒットします。また、現在の国の名前でも検索すると、旧国名のデータもヒットします。日本語のメタデータをローマ字に自動変換し、オリジナルのメタデータにはローマ字がなくても、ローマ字での検索ができるようになっています。

ほかにテーマ別検索という機能があります。これは特定のテーマに即した検索ができるよう、あらかじめ検索対象となるデータベースを選択し、メタデータ項目を個別にマッピングできる機能です。日本刀、日本食、水墨画などのテーマ別検索を提供しております。

さらに画像検索という機能もあります。スライド上の赤い枠で示したアイコンをクリックすると、類似のサムネイル画像を検索できます。この機能はAIを用いて開発しました。

二つ目の「楽しむ」機能として、ギャラリーを紹介いたします。

ギャラリーは、様々な切り口で立てたテーマの下に、関連するデジタルコンテンツなどを集めた電子展覧会です。ジャパンサーチが集約したメタデータにひもづく多彩なコンテンツを紹介し、皆様に発見していただくことを目指しています。

現時点でおよそ200テーマのギャラリーが存在いたします。スライドの左側の画像は、ギャラリーだけを検索できるページです。トップページのギャラリーのコーナーの下にある「もっと見る」というボタンを押すと、このページに進みます。

三つ目の機能「活かす」のうち、最初にマイノートをお紹介いたします。

ジャパンサーチを検索したり、ギャラリーを見たりして、お気に入りのコンテンツに出会うことがあるかもしれません。そのときはスライドの左側の画像に見えていますハートのマークをクリックしてみてください。すると、そのコンテンツをマイノートに登録することができます。

マイノートには、メモをつけることができますので、お気に入りのコンテンツをメモ代わりに保存するようなイメージです。また、作成したマイノートは、CSVやエクセル、JSONなどの形式でエクスポートすることができます。これをウェブパーツとして、御自身のウェブサイトやブログに貼り付けて楽しんでいただくこともできます。

正式版では、さらにモードを切り替えることで、本格的な編集が可能となりました。先ほど「楽しむ」でお紹介したギャラリーを、御自身用のデジタルミュージアムとしてつくっていただくこともできます。

次に、共同編集機能（ワークスペース）をお紹介いたします。

正式版では、マイノートやギャラリーを同時にグループで作業することができるようになりました。ワークスペースは、URLとパスワードを共有しているメンバーであれば、誰でもアクセスできる空間です。

御覧のスライドは、ワークスペースの編集画面です。ワークスペースにアクセスすると、同時に参加しているメンバーが表示され、どのメンバーがどこを作業しているかも分かるようになっています。

ワークスペースで作成した成果物は、ジャパンサーチ上で公開することができます。また、ウェブパーツとして御自身のウェブサイトなどに貼り付けることもできます。

このワークスペースは、連携機関の権限で作成することができる機能です。

プロジェクト機能も正式版の新機能として用意いたしました。こちらも現時点では、連携機関向けの機能です。

プロジェクト機能は、いわば自分だけの「小さなジャパンサーチ」をつくることのできる機能です。プロジェクト上では、データベースやギャラリーの作成をはじめとして、連携機関ができることは全てできます。そして、ジャパンサーチ本体の検索などとは切り離されています。

プロジェクトに参加するメンバーは、連携機関のメンバーとは別に設定できますので、複数の機関が共同して行う一時的な事業の場所としても使うことができます。

こうして、プロジェクトで作成したデータベースやギャラリーなどは、ジャパンサーチ本体での横断検索や一覧表示の対象にはなりません。ジャパンサーチからそのプロジェクトのトップページに遷移し、その上で検索や表示を行います。

この機能は、教育や研究での利用を想定しております。例えば特定のデータを整理するための研究プロジェクトで、簡易なデータベースのベータ版や関連するギャラリーをつくって公開することができます。

「活かす」機能の最後にAPIを御紹介します。

ジャパンサーチでは、集約したメタデータをほかのアプリケーションで利活用できるよう、「ジャパンサーチ利活用スキーマ」に変換し、SPARQLエンドポイントから提供しています。

ジャパンサーチのSPARQLエンドポイントの利用方法や利活用データの仕様については、ジャパンサーチのページの一番下にある「開発者向け」のリンクから御確認ください。また、実際にエンドポイントから利活用データを取得して、ウェブアプリケーションをつくるためのチュートリアルをNDLラボ内で公開しています。

ジャパンサーチ正式版では、検索結果の詳細画面で、同じ作者による資料や同年代に作成された資料、同じ場所の情報を持つ資料など、関連づけられた資料が自動的に表示されるようになりました。これは利活用データを活用した機能です。

利活用データでは、作者名を英文表記や外部のIDと関連づけるといった処理を行っているため、海外の博物館や美術館に所蔵され、同じ表記で目録が取られている日本関係資料やWikidata上にある関連情報との横断検索が可能です。例えばEuropeanaやフランス国立図書館のデジタルライブラリー、Gallicaとジャパンサーチに登録されたデータとの横断検索も、利活用スキーマへの変換によって可能になっています。

ジャパンサーチの機能に続いて、デジタル情報資源の利活用について、見てまいります。

スライドの図は、デジタルアーカイブの利活用のイメージ図です。デジタルアーカイブは、ビジネス、ヘルスケア、防災など、様々な分野での活用が期待されています。

ジャパンサーチにおいては、教育では、探求型教育プロジェクト、Dolphin educational teamが小中高の学校でジャパンサーチを使った調べ学習の実践授業を行いました。

観光・地域活性化に関しては、アイデアとして、ウィキペディアタウンのように、その地域に関連する資料を用いて、ギャラリーを共同で作成し、ウェブサイトで発信することなどが考えられます。当館が昨年度実施したハッカソンで、そのような作品が発表されており。

学術・研究においては、正式版の新機能であるワークスペースを共同研究のツールとして活用していただきたいと考えております。

デジタル情報資源を利活用する際には、それぞれのデータの利用条件を確認していただく必要があります。ジャパンサーチは、各コンテンツをどのような条件で利用できるか、分かりやすく表示しております。

メタデータとサムネイル画像については、スライド左側の図のとおり、データベースの紹介ページに利用条件を表示しています。詳細な利用条件を確認できるよう、連携機関のページへのリンクが張られている場合もあります。

デジタルコンテンツについては、メタデータやサムネイル画像と同様に、データベースの紹介ページに利用条件が書かれているほか、スライド右側の図のとおり、検索結果のページでデジタルコンテンツの権利部分と用途別の利用条件が一目で分かるよう、示されております。また、デジタルコンテンツの権利区分は、横断検索結果の絞り込みにもご利用いただけます。

最後に、ジャパンサーチの今後の課題を3点お話しいたします。

1点目は、連携の拡充に向けた取組の強化です。つなぎ役が存在しない分野や地域において、つなぎ役をつくり出すこと、また、つなぎ役を担う機関への支援などについて、検討が必要です。

2点目は、広報の強化です。アクセス数はまだまだ伸びるはずだとの声をいただきます。ユーザーコミュニティの育成にも取り組む必要があると考えます。

3点目は、利活用の促進です。単にアクセス数を増やすだけでなく、APIやワークスペースといったジャパンサーチの活用基盤である機能を、教育や研究現場などで使っていただけるよう、働きかけていく必要があります。また、連携機関同士がつながりを強化できるような仕組みの構築も必要だと考えております。

そして、ジャパンサーチの魅力を一層増していくためには、連携機関の皆様の御協力が欠かせません。コンテンツの充実に向けた取組を継続し、オープンな利活用が進むようなデータ整備を行っていただけますよう、引き続き御協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

以上で終わります。御清聴いただき、ありがとうございました。（拍手）

2、パネルディスカッション

○司会 それでは、これより第2部、「ジャパンサーチの挑戦～ポストコロナ社会とデジタルアーカイブ～」のパネルディスカッションに移らせていただきます。

それでは、パネリストの皆様、御登壇をお願いいたします。

モデレーターは、東京大学大学院情報学環教授の吉見俊哉先生にお願いしております。

それでは、ここからは吉見先生に進行をお任せいたします。

吉見先生、どうぞよろしくをお願いいたします。

○吉見教授 東京大学、吉見でございます。

今日は、実際に私は見えないのですが、オンラインの向こう側に600人以上の方々がいていただいて、私たちのディスカッションを聞いていただくということで、とてもうれしく思っております。

これから第2部のディスカッションは、ジャパンサーチの挑戦、ポストコロナ社会とデジタルアーカイブということなのですけれども、冒頭、タイトルの意味について、私から説明させていただいて、それからパネリストのそれぞれの方から自己紹介とジャパンサーチを使った印象とか、感想、そういうことをお聞きするところから話に入っていきたいと

思っています。

今回のタイトルは、ポストコロナ社会とデジタルアーカイブとつけております。先ほど来の御説明でも、コロナということが盛んに出ていて、私たちは今のウィズコロナの状況と切り離して現在を考えることができなくなっています。コロナということであると、封鎖とか、隔離とか、ステイホームとか、感染防止とか、要するに接触とか、交渉とか、集まることの禁止、ここも実際にはこの場にはみんなが集まれないわけです。今、私たちは、そういう形でコミュニケーションせざるを得ないという状況の中にあります。

しかしながら、私は思うのですけれども、コロナでとても印象に残った場面というのは、3月頃でしたでしょうか、イタリアの状況が非常にひどくなったときに、テレビのニュースで見たのですけれども、街路と申しますか、道路を挟んで、町の人たちがバルコニーに出て、道路を挟んで、バルコニー越しに街の人たちが合唱をする、あるいは様々なサインをやり取りするという、とても印象的な場面がございました。まさに道路空間をむしろパブリックなコミュニケーション空間に変えている瞬間を見たのです。

私は、今日、これから議論していくべき問題も、そこと同じ問題がある、あるいは同じことに通じるスピリッツと申しますか、精神と申しますか、そういうものがきっとあるはずだと思っています。封鎖とか、隔離とか、ステイホームと言われながらも、私たちはコミュニケーションをやめていません。フィジカルには集まれないのですけれども、集まるということをやめていません。

どうやっているかという、オンラインなのですけれども、しかしながら、オンラインは、様々な次元に広がっています。今日もオーストラリアからTessa Morris-Suzukiさんに来ていただいておりますし、沖縄からは真喜屋力さんに来ていただいておりますし、物すごく空間的にも広がっているわけです。

しかし、空間的に私たちが広がっているということだけではなくて、時間的にもオンラインになるという、少なくともかもしれないけれども、過去と対話をすることができる。しかも、過去との対話がすごく容易になっているということがあるようにも思います。言うまでもなくそれがデジタルアーカイブであり、これから議論していくジャパンサーチの可能性でもあると思います。

その辺りのことを私たちは議論し、大きな方向としては、今日の議論の中でジャパンサーチ、つまり日本を探すときの日本と申しますか、ジャパンとは一体何なのだということを最後まで議論していくことができればと思っている次第です。

パネリストの方々に順番に御紹介をしていきたいと思っております。

全員を一気に御紹介する方法もあるのですけれども、時間のことも考えて、お一人お一人を紹介して、それからそれぞれの方に順番に、今、どういう研究とか、活動をされているのか、そして、ジャパンサーチを使ってみて、どんなことを思ったのかということをお話しいただきながら、パネリストを御紹介していきたいと思っております。

その順番なのですけれども、物理的な距離が今、この場、私のいる場所と言ってもいい

のですけれども、この場所から遠い順番にお話をいただきたいということで、一番遠いのはオーストラリアです。キャンベラでしょうか、オーストラリアからTessa Morris-Suzukiさんに参加していただいています。

Tessa Morris-Suzukiさんは、多くの歴史家の方々は、ポストコロニアル理論とか、そういう視点から日本の近現代史をずっと書いてこられたスペシャリストとして、非常によく御存じだと思います。現在、オーストラリア国立大学の名誉教授でいらっしゃいます。

初期には、日本の技術史とか、経済史とか、そういう研究から出発したのですけれども、その先でマイノリティーの点から日本の歴史をもう一回相対化する。例えば2000年にみすず書房から出された『辺境から眺める アイヌが経験する近代』という本は、大変話題になりました。その後も朝日新聞社から『北朝鮮へのエクソダス「帰国事業」の影をたどる』という、大変な労作をお書きになられています。

付け加えて言えば、大分前なのですけれども、私とTessaさんは、共著で『天皇とアメリカ』という対話の本を出しております。その本の中に『過去は死なない メディア・記憶・歴史』という本もあって、これはとても今日の話ともつながると思います。

そういうTessaさんにオーストラリアから参加していただいて、ジャパンサーチについて、一言お話をいただくことにいたしました。

Tessaさん、今、御研究のことやジャパンサーチへの感想を一通りといえますか、簡単にお話しただけないでしょうか。お願いいたします。

○Suzuki教授 皆さん、こんにちは。御紹介をいただきました、Tessa Morris-Suzukiです。

今回、お招きくださり、本当にありがとうございます。

皆様とフェース・トゥー・フェースの形でお話ししたいと思いましたがけれども、今の状況ではそれは不可能です。ただ、こういう形でもお話ができるのは、とてもうれしいです。

吉見先生がおっしゃったことですが、現在、私が研究しているテーマの一つは、マイノリティーと先住民のことなので、その関連上、樺太、サハリンの歴史資料及び同領域の先住民に関する資料を探す機会が多いです。

その関係でジャパンサーチのすばらしさに驚いています。特に現在続いているCOVID-19の状況では、恐らく私たちはみんな、どのようにオンライン技術を活用しながら、国境や距離を越えて連携できるかということをいろいろ考えさせられていると思います。多くの人々と同じように、私もCOVID-19の状況でたくさん困っているところがありました。

御存じの人は多いと思いますがけれども、私が住んでいるオーストラリアでは、COVID-19関係の制限は非常に厳しいです。ですから、原則として出国するのは、今、不可能です。今年、本当は研究のために日本とサハリンに行く予定がありましたが、それは全く不可能になってしまいました。ちょうどそのときにジャパンサーチを紹介されたので、本当にうれしかったのです。救いとなりました。

私が調べているのは、主に幕末、明治、大正時代のことなのです。著作権が既に切れているものが多いですから、ジャパンサーチを使いながら、全部をオンラインで読めるもの

も多いです。特に私にとっては、ジャパンサーチのおかげで、一つのデータベースで本とか、学術論文だけではなく、国立公文書館の資料、あるいは博物館の展示物の写真、古い動画も見ることができるのは、とても重要なことです。そうすると、例えば樺太のアイヌの人々が昔、使っていた道具などの説明を読んでから、そのまますぐ博物館に入って、実物の写真をオンラインで見ることができるのは、とても重要なことです。

もう一つは、ジャパンサーチは私にとっても、多くの利用者にとっても、大変使いやすいので、それも大きなメリットだと思います。これから海外の日本研究を行っている研究者たちにも、日本研究を行っている学生たちにも、宝物になると思います。恐らくこれから少しずついろんな文献、資料、映像、写真、例えばオーラルヒストリーの録音なども加えると思います。それも非常に期待しています。

もう一つは、ジャパンサーチは私にとっても、多くの利用者にとっても、大変使いやすいので、それも大きなメリットだと思います。これから海外の日本研究を行っている研究者たちにも、ジャパNSTADIEZの学生たちにも、宝物になると思います。恐らくこれから少しずついろんな文献、資料、映像、写真、例えばオーラルヒストリーの録音なども加えると思います。それも非常に期待しています。

これからの国際連携は、いろいろ発展すると思います。ですから、例えば私の研究分野から考えると、ロシアのサハリンの博物館と公文書館の中には、植民地時代の樺太の重要な日本語資料もありますから、何かの形でジャパンサーチと連携できると、とても素晴らしいことになると思いますし、そういうワークスペースを使いながら、これからロシアにいる研究者、日本にいる研究者、ほかの国の研究者、そして、サハリンの先住民の人々、樺太のアイヌの人々とか、日本の人々が共同で資料を見ながら、自分の感想とか、自分の考えを共有できると、本当に素晴らしいものになると思います。ですから、これからとても楽しみにしています。

○吉見教授 ありがとうございます。

今日は、オーストラリアからもオンラインでかなりの人に参加してもらっています。ディスカッションが日本という場を越えて、いろんなところに広がっているということでございます。

それでは、オーストラリアの後には、NDLの特別便で沖縄に飛んでみたいと思います。

沖縄までドラえものどこでもドアみたいなもので、一瞬で飛んでしまうのです。沖縄からは、沖縄アーカイブ研究所の真喜屋力さんに御参加いただいております。

真喜屋さんのツイッターを見ますと、こういうふうに出ているのです。1992年に沖縄の映画『パイナップル・ツアーズ』で監督デビューをされています。テレビアニメ『アークエトガッチンポー』の監督もされ、2005年から沖縄県にある桜坂劇場でお仕事をされていますが、現在は沖縄県で8ミリフィルムの収集とデジタルアーカイブ化の作業を行いつつ、好き勝手なことをしているということで、この好き勝手なことはどういうことなのか、後で御説明があるといいと思います。

いずれにせよ、今、沖縄アーカイブ研究所を主宰されていて、こちらで8ミリ映画のアーカイブ化に積極的に取り組まれている、そういう視点のお仕事を紹介していただきながら、ジャパンサーチの印象や期待をお話しいただきたいと思います。

真喜屋さん、お願いします。

○真喜屋氏 沖縄の真喜屋力と申します。よろしく申し上げます。

今、御紹介にあったように、もともと映画づくりから入ったのですが、今回、パワポを用意しているので、そちらの映像も一瞬出していただけますか。

こういう肩書きです。沖縄アーカイブ研究所のプロデューサーです。こちらで8ミリの収集をしております、もう一つ、沖縄デジタルアーカイブ協議会の会長という肩書きもあります。これは組織の集まりとか、企業の集まりなどではなくて、主に個人です。

沖縄デジタルアーカイブ協議会というデジタルアーカイブに関わる個人です。主に組織の中、博物館とか、公文書館とか、そういうところにいるのですけれども、私たちが集まって、沖縄のデジタルアーカイブをどうにかしていきましょうという話を進めております。

今、御紹介がありましたように、もともとは映画制作から劇場経営まで、むしろどちらかという、つくり手側からこの世界に入ってきて、学生時代、そういう映画をやっていたということもあるのですけれども、沖縄の8ミリがどうなっているのだろうということが気になって、これらを受けたら、結構集まってきました。

現在、こういうふうにブログで沖縄アーカイブ研究所という形で、動画を配信しております。併せてイベントなども好き勝手にいろんな企画をやって、来週も上映会がありますし、来月も2本ほど上映会を予定しております。

アーカイブの対象としては、沖縄県内の8ミリフィルムに限定していて、あと、それに付随する資料です。ビデオなどになると、ちょっと広くなり過ぎるので、8ミリと限定しています。沖縄は、戦時中までの資料をまとめたものはいっぱいあるのですけれども、戦後史が意外となくて、それがちょうど8ミリに重なってくることも、隙間商売的な感じなのですけれども、マッチして、結構ニーズが高まっています。

収集、保存、利活用というエコシステムの中で、うまくやっているのですけれども、もともとは興行に関わってきたこともあって、利活用とか、二次創作に映像を利用していかんということは、常に心がけて活動しております。

現在、収集本数が1,585本、フィルム提供者が84組です。個人と会社などがあります。デジタル化済みが199時間で、今日辺りに200時間を超えていると思います。ネット上では282本なので、まだまだ公開していない映像が大量に眠っております。

フィルム資料は大体1950年代から1980年代まで、街の風景から個人の生活、これは祭りの道具などをつくったりする文化資料になります。

これは生活資料です。

沖縄県の本島内では一番古い祭りの映像などもあったりして、人が多かった時期の映像などもあるので、非常に重要な資料になっています。

今、映っている2枚の写真は、8ミリの中に横に流していく映像があるのですが、これをフォトショップなどでつなぐことで、パノラマ写真として、その場所の風景とか、資料をつくれます。二次的に資料をつくり出す活動をやっていて、こうすると、当時の風景がより見えてくるのではないかと思って、二次的な資料づくりをしております。

利活用例としては、今、言ったように上映会、来月なのですけれども、ドライブインシアター、コロナということもあって、そういうところで1時間ぐらいの上映をやります。

映画祭などにも出品しています。これも来月に練馬沖縄映画祭を東京でやります。

テレビ番組は、うちで独特な方法なのですけれども、週1で8ミリを紹介するというコーナーがありまして、スポンサーも個別について番組がありまして、こういうものをやることによって、見た方がうちにもあるということ、またフィルムが届くというサイクルができています。当然資料映像として、東京のキー局などから問合せが来るのですけれども、テレビや映画などの映像資料としてつかってもらったり、アーティストへの提供、ミュージシャンのPVとか、バックに流す映像とか、インスタレーションとして、アーティストに作品の中に盛り込んでもらうとか、そういうことも積極的にお願いしています。

著作権に関しては、もともと私たちが映像を頂く段階で、こういう利用法を想定した使われ方として、署名を書いてもらっています。

ここがジャパンサーチと関わってくるのですが、地域別の内訳、映像があるのですが、沖縄県内の映像は79%ぐらいで、残りは県外、海外、どこだか分からない映像があります。こういうもので、沖縄県内の映像は利用しやすいのです。

これも名護市という沖縄の北部の町で、私もたまにしか行かないところなのですが、こういう映像は、私たちが見ても、ただの街並みなのですけれども、当時の人から見ると、上映会をやると皆さんが喜んですごく沸くのです。あの家に誰々が住んでいたとか、御当時の映像は、土地に持っていくことで非常に価値が上がります。それを何とかして届けたいということです。

例えばこういう祭りの記録であるとか、駅の映像です。これが兵庫県の路線電車です。これ以外にも例えば京都、大阪、広島など、ほかに観光地などの映像がいっぱいあります。そういうものをとにかく御当時の博物館との連携をうまくやったりとか、こういうものがあるのだということを、まず地域の方、御当時の方に知ってもらえるツールとして、ジャパンサーチはすごく期待しております。

もう一つ、大問題なのはいわゆる孤児作品のフィルムです。現在、私たちのフィルムの全体の30%を占めています。たまたま私たちにフィルムを提供する人で、こういうものを好きな方がいて、面白がって、次々にネットオークションで勝ってきてしまうのです。それも大変なのですけれども、デジタル化をして内容を確認していて、沖縄の映像ですらないので、何が映っているのか、誰に許諾を得ればいいのか、非常に困難です。例えば大津市役所の旧庁舎とか、これはユネスコ村です。林医院という病因の方が撮ったのは分かるのですが、それ以上追求できない。歌舞伎俳優の運動会とか、映っている方は分かるけれ

ども、届けられていません。許諾を取るためには、こういう人たちとうまく連絡を取ることが必要なのです。

私が期待していることは、沖縄の情報を県内に配信して、収集を呼びかけることはもちろんです。例えば米軍の兵士などがアメリカに持ち帰った8ミリ映画は、戦後すぐからありますから、そういうものを探したい。

今、言ったように、地域連携をやって、御当地の映像、孤児作品の調査は、例えば先ほど御紹介のあったジャパンサーチも、プロジェクト機能などで、例えばこういうオフネットワークスとか、あまり表に出せないけれども、どういうふうを探していけるのかみたいな、その情報を必要としている人が協力して、著作権者を探すみたいな窓口などがつくれたら面白いのではないかという期待を非常に持っています。

そういうことで、沖縄からの自己紹介です。どうもありがとうございました。

○吉見教授 真喜屋さん、ありがとうございました。

言うまでもないことですが、沖縄という場所は、日本、あるいは近代日本の相対化するといいますか、見返していく、非常に決定的に重要な場所なわけです。先ほどのサハリン、北方も、もう一つあるわけですが、私が日本の歴史とか、日本の現在を考えていくときに、決定的に必要な一つの場所、あるいは視点が沖縄であることは、言うまでもないことであるわけです。それとアーカイブがどうつながるのかということ、その辺りのことを後でもっと議論していきたいと思います。

それでは、再びNDL特別便に乗って、沖縄から東京に飛びたいと思います。東京のどこなのかということ、今、よく分からないのですけれども、国立国会図書館ではないということは分かっているのですが、東京の某所にいるチェンさんに参加していただきたいと思います。

ドミニクさんは、クリエイティブ・コモンズ・ジャパンを設立し、現在も理事をお務めになられて、メディアアートの関連、あるいはクリエイティブ・コモンズ関連では、非常に多くの人に知られていて、活発な活動をされている方です。

現在は、早稲田大学で教えられていますが、実はドミニクさんは、UCLAを卒業された後、私がずっと教えて、今も教えております東京大学大学院情報学環に来られまして、そこを卒業された方でもありますので、そういう意味では、昔から結構よく知っているという方です。

今日は、クリエイティブ・コモンズという視点から、ジャパンサーチについて、ドミニクさんにぜひお話をいただきたいし、その未来のビジョンについても、語っていただきたいと思います。

ドミニクさん、お願いします。そこはどこですか。

○チェン理事 私の家です。なので、あまり住所はさらしたくないのですけれども、東京にあります。

○吉見教授 某所ですね。

- チェン理事 某所です。
- 吉見教授 そんなに遠くないですね。
- チェン理事 東京にあります。すみません。
- 吉見教授 東京の某所からドミニクさんに参加していただきます。
- チェン理事 よろしく申し上げます。

今日は、今、吉見先生に御紹介あずかりましたように、クリエイティブ・コモンズの人間として、ジャパンサーチ及び現状のデジタルアーカイブについて考えていることを話してくださいというお題をいただきました。

クリエイティブ・コモンズの説明をしていると、それだけで終わってしまいますので、より広範なテーマとしては、二次利用をどうやって促進するかということなので、自己紹介も絡めながらお話ししたいと思います。よろしくお願いたします。

先ほど吉見先生がおっしゃられたように、私はもともと東京大学の情報学環に在りて、これは私が修士の頃なので、16年ほど前なのですけれども、東京にインターコミュニケーション・センターというメディアアートセンターがあります。そこで私が22歳のときに初めてやった仕事というのが、そのデジタルアーカイブをつくるということだったので。

この館というのは、様々な展示以外にも、アーティストトーク、シンポジウム、その他映像作品の上映、ワークショップなど、多岐にわたる活動を全て映像で収めるということをしてきました。そのときの私の仕事というのは、映像を全てオンラインで公開して、かつソースデータも一緒に公開する。つまりこうした映像を例えば教育目的であったり、もしくは創作のために自由に使ってください、そのことを明示するためにクリエイティブ・コモンズ・ライセンスというものを付与した形で、ソースデータも提供するというのです。これは2006年に一般公開、インターネット上で公開するというのをやりました。私は、今、ICCの人間ではないので、また別の方に引き継いでいただいたのですが、現在も着々とコンテンツは増えております。

次、お願いします。これは先々月、ICCさんで、このアーカイブの名前がHIVEという名前なのですけれども、HIVEというデジタルアーカイブをアーティストや研究者の方たちがどういうふう日々使っているのかというインタビュー集を公開されていて、先週は研究者の前田ジョンさんのインタビューなども追加されていたり、その前は徳井直生さんという、今、AI研究で非常に有名な方なども、この映像アーカイブを通して、メディアアートの歴史を学ぶという、そんな使い方を語っていただいています。

このデジタルアーカイブをつくる際に、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスというものがアメリカで生まれて、まだ2年ほどしかたっていなかったのですが、日本の著作権法との整合性を合わせるという作業も、先ほどのNPOを準備しながら、法律家の仲間たちとやってきました。

その後、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスを活用したプロジェクトのプロデュー

スであったり、企画をやってきたのですけれども、これはちょうどおとしの暮れに発表したもので、ジャパンサーチの内容とも関連が深そうだと思うので、御紹介します。新潟県長岡市で出土された火焰土器です。火焰型土器のベースとなった火焰土器の3Dモデルを長岡市さんが製作して、それをネット上で公開する際に、クリエイティブ・コモンズのパブリック・ドメインライセンス、CC0というものがありまして、それを付与するお手伝いをさせていただきました。

長岡市さんの縄文文化発信サポーターズさんという事務局が主体となって、縄文オープンソースプロジェクトという名前で、当時は火焰土器だけだったのですけれども、翌年に右側に映っているミス馬高という、馬高遺跡、出土された土偶の3Dモデルをつくりました。これがかなり高精細なモデルで、一つ数十メガバイトのファイルサイズとなっています。先ほどお見せしていた冊子をつくって、こんなふうに使えろという事例を準備して、ネット上と印刷版をあちこちで配るということをしました。

デザインエンジニアリングのスタジオであるTakramさんに、火焰土器を使って氷の器の型をつくっていただきました。

建築家のnoiz architectsさんという方たちに、オリンピックの東京選手村が火焰土器の形をしていたらどういふ建築物になっただろうかという、架空の建築物をつくっていただきました。

アーティストの市原えつこさんにデジタルシャーマンが火焰土器を手にしたら、それをどういふふうに使っただろうかということで、少し未来的な創造力を働かせていただいて、人型ロボットが火焰土器の周りでひたすら礼拝のダンスを踊るというパフォーマンスに使っていただいたりしました。

数が多過ぎて全てお見せできないのですけれども、幾つかだけお見せすると、一般公開した後、ツイッター上で、たくさんの方がこれを使って、こんなものをつくりましたという報告をツイートしていただきました。

これは3Dプリンターで出力されたものを電子回路で制御したランプカバーとして使っている事例で、実際に動画があります。

昨今、コロナ禍の生活の中で、VRに対する注目度がすごく増えているのですけれども、火焰土器のモデルをいわゆるバーチャルユーチューバーの-avatarとして製作された方がいて、これをこういうふうウェブサイトで公開していただきました。

それをまた別の方たちが使って、土偶と火焰土器が戦うゲームのようなものなのでも、こういう想定外の非常に創造的な二次利用がたくさん見られました。

長岡造形大学という美術大学がありまして、現在、ここの学生さんと教員の方たちと一緒にこの続編を用意してまして、日用品をミス馬高と火焰土器を使っていろいろとデザインできないかということをやっています。

こういうカトラリーとか、3Dプリンターで型をつくって、それを鑄造のプロフェッショナルの方に、実際にろうなどを使って精鑄していただいたり、右側に映っているのはかん

ざしです。モチーフとして使っています。

左側に映っているのはスピーカーのケースなのですけれども、こういうものだったり、右側にはお鍋の五徳です。こういうものを火焰土器の縁のデザインをうまく活用してつくるといふ、今、こういうデザインの事例を集めているところです。

今、お見せした一連のものというのは、来月、21_21 DESIGN SIGHTというところで、私がディレクションを務めています、トランスレーション展という、6カ月ほど展示をするのですけれども、そこでも紹介する予定となっていて、現在も製作中です。

このような形で、私自身も自分のプロジェクトでパブリック・ドメインになったものを使う機会が非常に多いのですけれども、今、お見せしているものは、私がつくっている本として、青空文庫のデータベースと各図書館のデジタルアーカイブを使って、パブリック・ドメインとなっている日本近代文学の作品の内容がかなり載っている本などをつくったりしていますので、こういう利活用の方法もあるということです。

これは全く別の観点なのですけれども、今、私が研究でつくっている発酵ロボットでして、ぬか床の微生物と対話ができるロボットを使っているのですが、こういうものをつくる際にも、伝統的な木おけの形などをデジタルアーカイブで調べています。

一つ目を研究する際、妖怪の図像などを調べる上で、こういうデジタルアーカイブが非常に役に立つということです。

長くなってしまいましたけれども、二次利用にどうやってつなげるかという話はかなり重要になってくると思うのですが、その際に3点ほど要点があると思っています。まずはオープンソースです。メタデータにアクセスすることも当然重要な前提条件なのですけれども、生データ、ソースデータが提供されている状態、そのデータの品質が製作に耐えられる高品質であるということ。さらに三つ目は、アクセシビリティが容易であるということです。アクセスが容易であること、この三つが全て整備されていないと、なかなか一般のクリエイターの方などに浸透しづらいと考えております。

そのような観点で、昨今、二次利用が非常にしやすく、高品質でアクセシビリティのいいサイトが増えていまして、こちらの観光予報プラットフォーム推進協議会さんが制作されているFIND/47というウェブサイトは、日本中の高品質な風景写真が見られて、コンテンツなどを開いて、定期的に表彰していくということをやっているし、私もここの審査員を務めたりしています。

各写真のタイトルに加えて、それが撮影された場所、下にダウンロードのフォーマットとクレジットの方法などが書かれているのですけれども、このサイトに上がっているものは、クリエイティブ・コモンズの表示ライセンスで公開されていることもあって、例えば広告の制作現場などでも、容易に使用可能な品質とアクセシビリティが担保されているいい例だと思います。

EuropeanaなどもUX、UIの改善というのはいつも行っていて、例えばこれはEuropeanaのある作品のページから、収蔵元のアーカイブに行かずとも、直接ダウンロードができて、

これはある絵画をランダムにダウンロードした例なのですけれども、非常に高精細な画像にツクリックぐらいでアクセスできるので、地道なUXの改善が重要だと思っています。

ジャパンサーチに期待することということで、このような活動をしている中で、1点目は、既にジャパンサーチがAPIを提供されているということで、私が個人的に一番興奮しているところです。ジャパンサーチのAPIを使って、何かアプリケーションをつくりたいと思っています。ハッカソンなども既に行われているということで、非常にすばらしいと思います。そういうオープンソースの開発のあり方も、今後、非常に重要になってくると思います。

あとは、今日、お話しした研究目的以外での創造的な二次利用の推進をどうやって奨励していくかということです。ここら辺は、企画を立てて、定期的にコンテストとか、そういったイベントを開いて、周知を高めていくことも大事だと思います。

あとは、最後のほうでお話ししたように、連携機関さんのデータベースのUX、ユーザビリティがまちまちであるというのが現状であると思いますので、ジャパンサーチだけではなく、連携している文化施設全体のUXの底上げも視野に入れて、考えていくべきではないかと思っています。

すみません、長くなってしまいましたけれども、以上となります。

○吉見教授 チェンさん、ありがとうございました。

チェンさんは、縄文時代から参加していただいたということで、分かりました。東京は東京なのですけれども、今の東京というよりも、はるか数千年を超えて、縄文から来ていただいたチェンさんでした。

最後のほうで妖怪の話があったのですが、別に打合せはしていないのですけれども、妖怪つながりで国会図書館にまた特別便で戻ってきて、この場でのお話をいただく形にしたいと思います。ようやくここに戻ってまいりました。

次にお話をいただきたいのは、早稲田大学の岡室美奈子さんです。岡室先生は、今、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館の館長をされていらっしゃいます。同時にベケットの専門家として大変よく知られていますし、それから、テレビドラマについても随分いろんなことをお書きになられて、スペシャリストでもいらっしゃいます。

もう一つ、隠し玉はオカルトイムズで、オカルトイムズの話と、今、早稲田の演博の館長でやっていらっしゃるものがどうつながっているかというのは、後のほうで、岡室先生のお話の中にも出てくるのではないかという気がいたします。

岡室先生、ジャパンサーチを使っていただいて、いろんな発見があったと思いますし、演博でやられていることとのつながりも含めて、一通りお話をいただきたいと思います。岡室さん、お願いします。

○岡室館長 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長の岡室でございます。

私が館長を務めております演劇博物館は、試験版の段階からジャパンサーチと連携させていただいております。私自身の紹介は、今、吉見先生がしてくださりましたので、今日

は早稲田大学演劇博物館とジャパンサーチということで、少し御紹介をさせていただきます。

スライドを用意しております。スライドの画面、見えておりますでしょうか。

それでは、駆け足になりますけれども、御紹介させていただきます。

これが演劇博物館の外観でございます。外観の由来は、今日は時間がないので申し上げませんが、早稲田大学の構内でございます、非常にきれいな建物です。

簡単に概要を御紹介いたしますと、創立が1928年（昭和3年）で坪内逍遙が作りしました。アジアで唯一、世界有数の演劇映像専門総合博物館でございます、100万点に及ぶ多種多様な収蔵品を誇っております。そして、今日の話に直接関係があるところでございますが、充実したデジタルアーカイブ・コレクションを持っております。

それでは、演劇博物館のデジタルアーカイブ・コレクションはどのようなものかということを中心に御紹介させていただきます。現在、早稲田大学文化資源データベースという、大学のデータベースとして統合されております。そこから演劇博物館のデジタルアーカイブ・コレクションにお入りいただけます。

デジタルアーカイブ・コレクションですけれども、とにかく対象が演劇である。そして、演劇というのは総合芸術ですので、演劇に関わるあらゆる資料を収集対象としております。

演劇博物館は、デジタルアーカイブへの取組は非常に早かったということをお慢りしております。1997年には浮世絵の画像検索システムを公開いたしまして、2001年、Wikipediaと同じ年にデジタルアーカイブ・コレクションを公開しておりますので、かれこれ20年の歴史がございます。

情報量と多様性ということで、現在、デジタルアーカイブで公開している目録数は85万4,286件、アクセスも非常に多くいただいております。役者絵データベースにつきましては、世界有数、世界一と申し上げてもよいのではないかと思います。

文化資源データベースのサイトに来ていただければ、バーチャル・ミュージアムも御体験いただけますので、ぜひ体験してみてください。

演劇資料とは、どんなものがあるかということに触れておきます。細かく御説明する時間はないのですが、このように、紙媒体、上演関係、映像・音源、その他、多種多様、様々な資料がございます。

今日の本題、ジャパンサーチとの連携でございます。演劇博物館は、現在、30種類ぐらいのデータベースを公開しておりますけれども、その中で3種類のデータベースを連携させていただいております。3Dデータベース、演劇博物館名品セレクション、企画展『演劇人 坪内逍遙』という、この三つでございます。

今後、浮世絵、演劇上演記録、映画館プログラム、幻燈など、順次、連携させていただきたいと考えております。

ジャパンサーチの画面でどのように見えるかということを中心に、少し御紹介しておきます。トップページの下の方に連携機関というところがありまして、そこをクリックしていた

だきますと、2ページ目に演劇博物館が出てまいります。

スクロールをしてみます。演劇博物館の説明がございまして、三つのデータベースが出てまいります。収蔵品の数々がこのように出てまいりますので、ぜひ御覧ください。

ジャパンサーチのトップページのギャラリーという機能は、先ほど御説明がありましたけれども、現在、ギャラリーで、企画展『演劇人 坪内逍遙』を御紹介いただいております。少し拡大しますと、こんな感じです。こちらもぜひ御覧ください。

何といたっても横断検索ができることが、ジャパンサーチのとてすてきなところですので、例えば能面の小面で横断検索をしてみました。御覧になって分かりますように、これはほんの一部ですけれども、非常にたくさんの小面が出てまいります。もちろん東京国立博物館さんは素晴らしい小面をたくさん持っていらっしゃるけれども、よく見ますと、赤丸をつけたところですが、演劇博物館の小面もございまして。

小さいので、よく分からないと思ひまして、少し拡大してみます。注目していただきたいのはここです。うっかり見落とししてしまいそうですけれども、3Dデータベースと書いてあります。これがほかの小面と差別化されているところがございます。

この画像をクリックしていただきまして、メタデータのページのURLから演劇博物館のデジタルアーカイブ・コレクションに飛んでいただきますと、例えばこういうものが御覧いただけます。

このデモンストレーションにお付き合いください。これは3Dデータですので、このように画面上で裏返したりすることができます。デジタルデータですから、もちろん拡大したり、縮小したりということもできます。拡大しますと、テクスチャーの細かい部分まで確認していただくことができます。これはデジタルデータの強みだと言えます。

御存じのように、能面は角度によって表情が変わります。そういった変化も御体験いただけます。

演劇博物館の3Dデータの優れているところは、ちょっと口幅ったいですけれども、このように光源を移動させることができます。光源がついていることで、様々な光の当て方を体験していただくことができます。

光源を移動できるだけでなく、背景の色も変えていただくことができます。

例えば夜の薪能の能面が炎に照らされている様子もこのように体験していただくことができます。

このように、3Dデータを公開することで、貴重な資料を復元・再現をしていただくことができます。そうしますと、例えば災害などでオリジナルが失われてしまったりするような事態が起こったときに、もちろんオリジナルの代わりにはなりませんけれども、どういふものであったかということを中心に精緻に再現することができます。また、教育現場などで気軽に使っていくことができます。様々な利活用の可能性をこれは秘めていると思ひます。

ついでにデジタルデータの利活用に向けてということで、もう一つだけ、事例を紹介さ

せてください。河鍋暁斎が描きました『新富座妖怪引幕』、1880年の作品もジャパンサーチで公開をされております。

このサムネイルだとよく分からないと思いますが、全体像はこのような形です。これは17メートル掛ける4メートルの巨大な歌舞伎幕ですので、なかなか実物を展示できないのですが、昨年、大英博物館で開催された漫画展では、非常に広いスペースを御用意いただいたおかげで、展示をさせていただくことができました。

この展示をきっかけに、高精細のデジタル画像をつくりました。しかし高精細のデジタル画像だけではつまらない、ほかの利活用の方法はないかということで、アニメーションをつくらせていただきました。本当はもう少し長いのですが、今日は短縮版だけ御覧いただきたいと思います。

(アニメーションが流れる)

○岡室館長 演劇博物館は、現在休館中ですが、開館の折に来ていただければ、フルバージョンを御覧いただけます。高精細画像でも遊んでいただけますので、ぜひお越しください。

それでは、最後のスライドになります。ジャパンサーチの意義という、ちょっと大上段な感じがいたしますけれども、すごく重要な意義として、博物館を社会に開いていくということがあると思います。博物館というのは、どれだけ貴重なオリジナルを持っているのかということで勝負するわけです。ですけれども、どなたでもアクセス可能にすることで、資料を専有することから共有していくことへ、そして、所有からシェアへと舵を切ったということだと考えております。

先ほど御説明がありましたけれども、知的資産のシェアと利活用により、新たな価値を創生する社会基盤としてのデジタルアーカイブジャパン、デジタルアーカイブ社会の実現を推進、まさにこのとおりではないかと思えます。ですので、閉ざされた博物館から開かれて連携する博物館へ、そういう変化が可能になるのではないかと。

博物館というのは、基本的に現物主義、オリジナル主義です。もちろんオリジナルは重要なのですけれども、それだけではなく、今、御覧いただいたように複製を利活用していく可能性が非常に大きく開けるのではないかと思えます。

横断検索による新たな出会いの可能性。知らなかった資料が一つのキーワードからつながっていく。

そして、これは私がとても好きなところですが、フラットな集合体。例えば先ほど小面の横断検索の画面を見ていただきましたけれども、重要なものもそうでないものも、フラットに出てくるわけです。そこから新たな連携の可能性も生まれてくるのではないかと思えます。

また、博物資料や文化財を「遊ぶ」と書きましたけれども、気軽にそういった文化財で遊んでみるという体験も、研究だけではなくて、一般の方にもしていただけるのではないかと思えます。そして、そういうことが、こういった文化的な資料に対して、新たな価値

を付与していく。そういう契機にジャパンサーチがなっていくのではないかと期待をしております。

以上です。ありがとうございました。

○吉見教授 岡室さん、ありがとうございました。引きつけられる大変魅力的な御発表だったと思います。

大分時間が超過してしまっているのですがけれども、4人のパネリストの方から、それぞれ独自の視点で、ジャパンサーチの将来の可能性について、御自身の活動と併せながらお話をいただきました。

先ほど冒頭でお話をいただきました、ジャパンサーチをつくっていく中心で、引っ張ってこられた国立情報学研究所の高野明彦さんと、国立国会図書館副館長の田中久徳さんに今の4人の方々からのお話について、レスポンスをしていただきたいと思います。

高野さん、お願いいたします。

○高野教授 先ほどの拙い挨拶は、座長の立場ということで、硬い話だったのですがけれども、ここではこの分野のいろいろなことに関わってきた個人の立場も含めて、お話しできればと思います。

私は、2004年に、文化遺産オンラインというものを文化庁と一緒にプロトタイプをつくったのですが、それ以来、こういう文化財系の情報の発信をどうしていったらいいのかとか、何で進まないのだろうかとか、ずっと悩んできたという背景があります。

いろんなところへ行って、いろいろとお手伝いするというのをやろう。早稲田の演博のいろんなデータベースを横断的に見るようなシステムをつくるということもやりましたし、先ほどTessaさんに見つけていただいた、南極探検の一番最初、探検の第1号の白瀬隊の映像が何と国立映画アーカイブに残っています。「映像でみる明治の日本」というサイトで公開されています。一番古いドキュメントのフィルムとして残っているものがあったりして、その発信をお手伝いしましょうということでやったりしたことが、今、ジャパンサーチを通じて、少しずつつながっていくことを、すごく感慨深く感じています。

真喜屋さんのお話もすごく面白かったのですが、自分たちが手に入りやすい映像を集めて、それを公開するというをやっているけれども、映っている側の人たち、その子孫たちのところへ持っていくことによって、映像の価値がさらに大きくなるというお話がありました。今ある場所ではなくて、別の場所のほうが、その映像の価値、記録の価値が高まる。まさにこれは今ある場所からそういう記憶を解き放って、もっと広い世界にフロートさせるというか、自由に行き来できる状態にすることが、情報の価値を高めることになるのだと思いました。

今、民族学博物館の方々は、探検に行ったときに写した写真をもう一回きれいに焼いて、同じ町を訪れるということをしているのですがけれども、見せると、みんな大喜びして、これはおじいちゃんとか、おじいちゃんがこんなに若いとあって、大笑いするという話がありますが、そういう記憶をもう一回リフレッシュする、それが次の新しい記録なり、イ

ベントにつながっていくという価値を非常に強く感じます。

これはデジタルのパワーだと思うのですが、デジタルのこういう写真が出たときから、こんなことが便利だ、空間を超えて届けられるとか、時間を超えて昔のものを持ってこられるとか、いろいろと議論されているものの、あまり社会的に大きく体験するというムードがなかった。個別にはもちろんできるのだけれども、頑張ればできるのだけれども、みんながやっているわけではないので、なかなかというところにとどまっていたのが、今回コロナのモードに変わって、普通に会えていた人と会うのもデジタル越しになってしまう。それだったら、沖縄の人とお話しするのも、毎日会っていた同僚と話をするのも、ほぼ一緒というモードになったわけです。そうすると、逆に私たちのコミュニケーションというのは、どこにいる人と、どういう形でお話しすればいいのかということが、デザインできるようになると思います。DX、最近はやりの言葉で私はあまり好きではないのですが、こういうものの価値が身にしみて分かるような社会になっていったらいいと思いました。

ドミニクの話はよく知っているのですが、ドミニクの指導に従って表記の方法を工夫してきたこともありますから、さすが、いろいろやっているということを感じました。

EuropeanのUX、インターフェースは非常に優れている。だから、それをジャパンサーチが取り込むと同時に、さらに産官学まで広げていくということをやったらというお話をいただいたのですが、これは非常にいいと思いました。

岡室さんの最後のスライドには、私が言いたかったことが全部載ってしまっていたので、私は何を話そうかと思ったぐらいです。要は専有・所有が価値であると深く信じていた博物館や美術館が、この機会に共有することの価値もばかにならない、たんに来てもらった人に見せるだけではない見せ方、シェアの仕方に目覚めていただくと、それを下支えするシステムになっていったら、ジャパンサーチ、あるいはそれ以外の関連サービスの価値は非常に高まっていくだろうと感じました。

評論家的ですが、以上です。

○吉見教授 ありがとうございます。

田中副館長、お願いいたします。

○田中副館長 国会図書館の田中と申します。

本日は、先生方から貴重なお話をいただいて、ありがとうございます。

ジャパンサーチはいろんなことができるかと期待していただいて、また使っていただける可能性が出てきて、それを分かる形で示していただけたというのは、本当にありがたいことだと思います。

本題から外れてしまうとあれなのですが、私たち国会図書館がデジタルアーカイブのポータルを自分たちでやろうと思ったのは、結構古くて、十数年の歴史があります。ただ、その中で、簡単にいかないことがいっぱいあって、私たちの基本である出版物と図書館のコミュニティーの部分は割合できるのですが、違う分野をつなぐということ

は、なかなかできませんでした。つなげば絶対にいろんなことができるし、価値があるサービスや効果が出る、そこから新しいことができるというのは、分かっている、なかなかそこを詰めることができないという状態がずっと続いてきたのです。

その中で、こういう形で、国会図書館も全体の分野の一つ、出版物も一つ、メタデータにしても、それぞれの世界の価値観があって、みんな自分たちが持っていた文化や伝統、ルール、権利のいろんな規則がある。そこをつなぐためには、みんなが一緒に参加できる場をつくらないと進められないということで、知財事務局さんに入っていて、国の事業としてプラットフォームが整備されることで、私たちもその中でどういう形でやっていけば、デジタルアーカイブのポータルができるのかということが少しずつ見えてきた。国会図書館の中で、完全に総括ができていないわけでは不是のすけれども、そこは大きな価値観の転換があって今日に至っているの、そういう意味で、いずれどこかでジャパンサーチに至る苦難の総括はあると思うのですが、今、環境ができて、発展できるスタートラインに立てたということに改めて感じているところです。

これからどうやって発展させていくかというところですが、そういう意味では、コロナの状況下で、今まさに使っていけるような、あるいは連携先を増やせるような仕掛けをつくっていくことが一番の課題なので、そこに向けて、また先生方のお力をお借りできればと思っております。

ありがとうございます。

○吉見教授 ありがとうございます。

この後、本当は2ラウンドぐらい議論を回して終わるということ、頭の中でデザインしていたのすけれども、既に残り時間が20分弱になってしまっています。しかしながら、ここからが本番なので、2ラウンドはちょっと無理なのすけれども、少なくとももう一回、それぞれの方々から出していただいた問いを深めて、方向性を見せるというところまでの議論をしていきたいと思っています。

この先、一番議論しなければならないことは何かと考えると、今日、最初の内閣府の知財事務局からも、デジタルアーカイブをコンテンツ・クリエイション・エコシステムと名づけるというお話がございました。要するに循環型の社会の中で、循環するコンテンツや知、あるいはそういうものが循環していくことは、どういうことなのかということをお考えということだと思います。

そして、今日のいろいろな方々の発表の中から出た話は、循環するということに、内側で循環しているということではないのです。ボーダーを越えて、つまり違う主体、沖縄のアーカイブだったら、本土との関係で循環していく。オーストラリアのTessaさんが最初にお話しした話からすれば、サハリンの記録、日本の記録、同じジャパンでも国内にあるものと外にあるもの、使うものでも、例えば地域の人を使うこともあれば、観光客を使うこともあれば、クリエイターを使うこともあるという、違う主体が使っていくということです。そういうことによって、価値が生み出されていく。つまり境界線を越えて、ボーダー

を越えて、違う主体、異なる立場の異なる考え、あるいは異なる国籍の人々が使っていくということの意味、これをもう少し話を深めていきたいと思います。

もう一回回すだけで、いっぱいになってしまう気がするのですが、お話をずっとお聞きになっていただいて、誰が使うのかということがとても重要だと思いますし、こういう記録を境界線を越えてというか、ボーダーを越えて使えるようになっていくことが、私たちが共有する歴史の在り方そのものの見直しというか、考え方の読み直しにつながっていくのではないかという気がするのですが、その辺りのことを一言コメントをいただきたいと思います。

Tessa Morris-Suzukiさん、お願いします。

○Suzuki教授 冒頭で吉見先生は、ジャパンサーチの中でジャパンはどこにあるか、何であるかという質問をしましたが、皆さんの話を聞きながら、それは非常に興味深い質問であると思います。例えば私が調べている樺太の歴史を見ると、一時期、日本の一部だったのですが、今は日本ではない。つまり資料を見ながら、日本の境界線も変わってきたということが分かると思いますし、同時に、例えば海外に住んでいる日本のコミュニティに関する資料とか、映像はたくさんあると思いますし、日本の文化のコンテンツは海外でいろんな形で使われてきたのですから、ジャパンサーチの枠組みを考えると、日本という意味の複雑さ、可動性的な存在が非常にきれいに見えてくると思います。

これからいろんなところからのユーザーが増えてくると思いますから、コンテンツは日本国内でも海外でも、興味深い形で使われるようになる可能性はたくさんあると思います。皆さんの話を聞きながら、これからどうなるかははっきり見えてこないのですが、そのこと自体は非常にエキサイティングで、これからいろんな可能性が見えてくるという気持ちで、皆さんの話を聞きました。

○吉見教授 ありがとうございます。

今、Tessaさんが可動性とおっしゃいましたが、つまり日本の境界線というものは、いわゆる日本列島、あるいは日本国という国境で切れている。これは一つの考え方としてあるかもしれないけれども、国境も動いてきているし、デジタルの世界の中で、日本がいろんな広がり方をしていくから、非常に多面的であり、だから、そんなに固定的なものがない、非常に多面的だというお話になると思います。

そういうことでいうと、沖縄もそうで、沖縄アーカイブも沖縄の地域の人たちが使っていくこともあるでしょうし、あるいは子供の教育に使われていくこともあるでしょうけれども、観光客が見ることもある。あるいは南米とか、アフリカとか、そういう人たちが使うこともあるかもしれない。そうすると、沖縄の像が、私たちが普通に思っている沖縄と違う可能性も出てくるのではないかという気がするのですが、その辺りのことを含めて、真喜屋さん、今までの発言について、レスポンスをしていただけないでしょうか。

○真喜屋氏 特に私が関わっている8ミリというジャンルに関していうと、ボーダーラインは意味がなくなってくるところがいっぱいあって、沖縄県内の人が撮った沖縄の映像と

というのは、観光地とか、行楽地とか、特別なところもあるのですが、市民の記録がない部分もあるのです。そういうものは観光客がいっぱい撮っていて、沖縄以外のところに散逸しているはずですが。先ほど言った米軍の兵士たちが記念に撮っていった映像もいっぱいあって、世界中に広がっている。そういうものに呼びかけていくためには、まず見てもらって、こんなものがある、こんなものは面白い、皆さん持っていませんかという問いかけというのは、県内だけでなく、世界中にやっついていかないといけないし、それぞれの人たちが興味を持つポイントの面白さというのは、沖縄の人がまた新しい発見をするきっかけになるだろうと思っています。沖縄だけではなくて、いろんな地域のフィルムが、私らの沖縄のところにあるようなことで、その辺の連携、情報交換というのは、ジャパンサーチに対して私が非常に期待している部分の一つです。

○吉見教授 ありがとうございます。

ドミニクさん、縄文式土器には国籍はないです。だから、日本の縄文式土器とか、そういうことはないわけで、火焰式土器はこういうものと違う次元に存在したし、今、私たちの関係も違う次元に成立するわけです。ドミニクさん自身がトランスボーダーな方で、そういう活動をされてきているし、そうすると、国境とか、ボーダーということと、アーカイブとか、デジタルというのは越えてしまいます。その辺りについて、発言していただけないでしょうか。

○チェン理事 ありがとうございます。

基本的に縄文時代の遺物を再解釈して、現代でつくり直すということ、先ほど紹介した活動でやっていると思うのですが、それは研究的な視点とは本質的に違うのです。そういう意味でいうと、何が出てくるか分からないというところに価値がある、そういう文化形態だと思っていて、このことはデジタルであろうとなかろうと、全てのアーカイブというものに共通する根本的な価値だと思います。

一言で言うと、それは予測不可能性とも呼べるのではないかと考えていて、同じような議論はクリエイティブ・コモンズであったり、オープンライセンスの文脈ですと、アメリカの法学者がジェネラティビティーという言葉を使っていて、インターネットという巨大なアーカイブがはらんでいる予測不可能な力、そこから何が生まれてくるか分からないけれども、そういうことを消極的に捉えるのではなくて、何が出てくるか分からないようなものが出てくるように、イメージとしては土壌を整えるとか、畑を耕すとか、そういう植物的な目から私はよく考えるのですが、そのためにアクセシビリティがある、そのためにユーザビリティがある。混乱の振れ幅がどんどん拡大されていくように確率を高めるといふ調整は、アーキビストであったり、プラットフォームの事業者ができることではないかと考えています。

○吉見教授 ありがとうございます。

岡室先生、先ほど最後に駆け足でお話しいただいた、資料の専有から共有へ、シェアへというのは、高野さんのお話にもあったようにとても重要で、我々がまさに目指そうとし

ているところだと思えますけれども、誰が共有をする、誰がシェアをするという、これは決して日本だけに閉じられているものではない。特定の地域とか、特定の大学だけではありませんし、日本だけに閉じられたものでもないと思うのですけれども、誰がシェアし、誰が共有する、そして、誰が価値を生み出していくという、そういうことをデジタルアーカイブの先に考えていくとすると、演劇博物館やあるいはジャパンサーチの役割というのは、どんなふうを考えられますでしょうか。

○岡室館長 一言で言うと、誰でも共有できるということだと思います。今日、ジャパンサーチは記憶の集積だというお話が出てきて、なるほどと感銘を受けたのですけれども、様々な資料にまつわる記憶があるわけです。例えば先ほど妖怪引幕をお見せしましたけれども、河鍋暁斎が描いたものですが、あれはそれぞれの妖怪が本物の役者さんたちの似顔絵でもあるのです。なので、例えばジャパンサーチでそれぞれの役者さんのことを調べることができるし、成立は1880年ですけれども、1880年で検索すると、1880年にどのような文化があったかということがいろいろ分かってくるのです。

演劇のアーカイブは、うちではよくドーナツに例えています。つまり演劇の公演そのものというのは、それ自体を保存することはできないわけです。幕が閉まると同時に消え去っていくものです。ですから、どれだけ周辺の資料をいっぱい集めて、できるだけドーナツを強固にしていくということが、演劇のアーカイブの使命だと思っています。そうしたときに、例えば妖怪引幕を取り巻く様々な文化、あるいは人々の暮らし、そういったものにどんどん広がって、どんどんつながっていく。それがジャパンサーチでは可能になるのではないかと期待をしています。

また、妖怪引幕は唯一無二の幕で、大英博物館では二度ほど展示されたことがあるのですけれども、実は海を渡っていたことがそれまでにもあったというのが、うちの副館長の研究などで分かっています。なので、ひょっとすると、妖怪引幕をジャパンサーチで見ることによって、例えばベルギーの方がそれにまつわる記憶を思い出してくださるかもしれない。そういうふうに多様な記憶の掘り起こしということが、これによって可能になるのではないかとということも期待をしております。

また、二次利用で、あのような妖怪引幕がアニメーションになることで、若い人が非常に興味を持ってくれるのです。古典芸能である歌舞伎の資料に、若い人がどんどん興味を持ってくださるような広がりもあるかもしれない。歴女と呼ばれる方々もいますけれども、歴史に関心のない若い人も多いと思うので、どんどん若い人にも使ってほしいと思います。

先ほど演劇のアーカイブというのは、ドーナツ型だと申し上げたのですけれども、今、ドーナツ型ではなくなりつつあるわけです。コロナ禍において、配信される演劇公演がどんどん増えています。配信されるものは、そのままアーカイブ化されるのです。そうすると、果たして演劇とは何なのかということを、今、根本的に問いかけられているのではないかと考えています。コロナ禍における演劇上演というものも、どんどんアーカイブに集積されることによって、その時々の人々の感覚、例えば演劇をやっている人がどう追い詰

められていったかといったことも含めて、演劇とは何かという問いとともに、人々の記憶の集積として、非常に重要な財産になっていくのではないかと思います。

先ほど予測不可能性ということをおっしゃいましたが、思いがけない形で、これからまた新しい文化を生み出していくような起爆力になり得るのではないかと期待もあります。

取りあえず、こんなところですよ。

○吉見教授 ありがとうございます。

今の岡室先生のお話を直に高野さんにつなぎたいと思うのですが、先ほどの高野さんのお話つまりアーカイブのコンテンツに、世界のいろんな違う場所の人、いろんな地域の人が接することは、記憶を掘り起こし、再生させ、次の歴史をつくっていくという機会になるというお話があったと思います。これはアーカイブのとても大きな力ですね。

○高野教授 そうだと思います。海外出張などで行った町の古い博物館、美術館に行くと、隅のほうに日本由来のものがちょっと飾ってあったり、データベースを調べると、そういうものを何百も何千も持っているのだと、でも、展示されているのはたった10個だったということをよく経験するわけです。

そういうところに本当だったら、デジタルの火を入れていくとか、そういうことをたまたま旅行したから思い出したのではなくて、もっと多くの人、もっとバックグラウンドのある人がそういうものを簡単に思い起こせるような、技術的には可能になっているのだけれども、そういうことを現実にやっている人が少ないという気がしています。

今回、ジャパンサーチをつくってやっていく過程で、日本の中はかなり奥のほうまで掘り起こすことができる気がしているのですが、世界の状況を見ると、ヨーロッパにはEuropeanaがあって、5,000万件ぐらいの貴重なデータベースがあります。アメリカはDPLA、Digital Public Library of Americaというところで、4,500万件ぐらいあります。オーストラリアはTroveをオーストラリア国立図書館がやっています。ニュージーランドはDigital NZをやっていて、これも図書館系がやっているということで、各地域でそういうデジタルなカタログなり、デジタルプラットフォームみたいなものが育ちつつあります。

日本もやっとジャパンサーチで追いついてきました。こうなったときに、日本に関係したものを、世界中のどこにどういうものがあるのかを探せないかということは、私のもう一つの個人的な欲望としてありました。ジャパンサーチに世界中から集めてこいということは、ちょっと無理だったのですが、それぞれの場所でそういうサービスができていいるのだから、それを利用すればいいのではないかと、志を同じくするパワフルな仲間たちに集まってもらって、8月1日にCultural Japanというサイトを公開しました。

ジャパンサーチの正式公開に間に合っただけよかったと思っていますが、ジャパンサーチで集めたものが4分の3ぐらい入っているのですが、プラス4分の1は海外からです。よく新聞などで見るメトロポリタンがこんなものを公開しました、ブリティッシュ

ミュージアムが北斎の幻の肉筆画、104枚を公開しましたというようなニュースが出てくるのですけれども、それをニュースで見て、へえーっと言って、そのとき記事になったものをクリックして、画像を見るかもしれないけれども、それでみんな忘れてしまうわけです。その内容に興味を持ったときに見つけられるようにすることはできないかといっつてつくったのがカルチュラル・ジャパンです。先週公開されたブリティッシュミュージアムの104枚もちゃんと引けるようになっていきますし、メトロポリタンのものもDPLAには入っていませんが、引けるようになっていくというサービスです。

これこそがある意味でここまで、世界中のミュージアムは開き始めているのだということの調査であり、新しいプラットフォームになると思っていて、これを使って、Tessaさんのような方にいろいろなものを見つけていただけると、それぞれのサービスをやっている人にも励みになるし、さらに今までは閉じていたけれども、広げることによって、こんなに活用されるのだったら、ぜひ開いてみようかという秘蔵のコレクションがどんどん開いてくるような流れになることを期待しているところです。

○吉見教授 ありがとうございます。

最後に田中副館長、まさにジャパンサーチを担っていく国立国会図書館の役割は、ある種のバージョンアップといたしますか、これまでの国立国会図書館に加えて、さらに大きくなると思うのですけれども、ジャパンサーチを推進していく国立国会図書館としてのビジョンというか、未来像というか、それは大変かもしれないのですけれども、一言、御発言いただけないでしょうか。

○田中副館長 国会図書館の事業は、法律に基づいて事業をやっているのですが、その中でデジタルアーカイブは、必ずしも中心にあるわけではないのは、正直に言うと、そういうことなのですけれども、これからの時代の記録を担う図書館として、保存機関として、私たちがやっている保存は、利用できる状態をどこまでもアクセシブルな状態を維持していくことが私たちの保存ですので、それに向けた中心的事業として、私たちも一員としてジャパンサーチを盛り立てて、国の記録なり、記憶がずっと残っていくような役割を果たしていくことについて、責任を持って続けていきたい、発展させていきたいと思っております。

○吉見教授 力強いお話をありがとうございました。

最後の締め言葉になると思いますが、私は人類共有の記録があると思っています。それはエクспリジットな、つまり意識化された形、あるいは形に残ったものだけではなくて、むしろ無意識であったり、見えなかったり、ほとんど痕跡のように消えてしまっているかもしれないものも含めて、人類共有の記憶が未来形としてあると思います。過去形ではありません。

つまりEuropeanaも、ジャパンサーチも、ほかのデジタルアーカイブも、過去の記録をデジタル化し、残していく。そして、取りあえず教育利用とか、観光利用とか、防災とか、いろいろあります。いろいろなものの利用価値はあるので、それで使っていく。これは取りあえずいいのです。それも必要なことなのだけれども、もっと重要なことは、過去の記録

が未来形だということです。その記憶や記録のボーダーを越えて、人類全体の共有の記録としてつくっていくことは、人類の未来でもあるビジョンを可能にするものがデジタルアーカイブであり、そして、デジタルアーカイブに世界中のいろんな人たちがアクセスすることによって、自分たちの記憶を再生していくとか、想起していく力がイメージネーションな未来をつくっていくわけで、そのようなメディアとしてのアーカイブを築いていく一つの契機が、ジャパンサーチにもあるのだと思います。

今日、パネリストとして6名の方、ジャパンサーチをつくっていった高野先生や田中副館長と、それを使っていて、いろんな発見をした4名のパネリストの方たちから、とてもすばらしく刺激的で、しかも、示唆に富む御発言をいただきました。それを一つのシンポジウムではありますけれども、未来の記憶の創生に向けて、ここから国会図書館やジャパンサーチ、あるいは関連するミュージアムの中でも役立てていただきたいと思ひますし、700名を超えるオンラインの向こう側にいる、私には見えない方々なのですけれども、その方々の中でもいろいろ使って、これがよかった、悪かった、こうしようということを開見していただきたいと思ひます。

せっかくチャットボックスに書いていただいた方もいたと思うのですが、時間切れになってしまって御紹介できなかったことをおわびしたいと思ひます。

それでは、徳原さんに全体の司会をお渡しします。

御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 吉見先生はじめ、皆様、どうもありがとうございました。

そして、聞いてくださっている見えない向こうの方々も、参加して下さっている方々に対しても、延長してしまって申し訳ありませんが、この熱い議論を私も聞いてみたかったので、10分延長させていただきました。恐れ入ります。

それでは、閉会に当たりまして、主催者を代表いたしまして、国立国会図書館電子情報部長、佐藤毅彦より御挨拶申し上げます。

○佐藤部長 国立国会図書館電子情報部長の佐藤と申します。

閉会に当たりまして、一言、御挨拶申し上げます。

本日のフォーラムは、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、オンラインでの実施となりましたけれども、日本だけでなく、世界各地から多くの方々に御参加いただくことができました。最後までお付き合いいただきまして、誠にありがとうございます。

ただ、機械の操作等、いろいろと不具合がございまして、先生方がお示しいただいたスライドなどもうまく御覧いただけなかったところもあろうかと思ひます。大変御迷惑をおかけしました。申し訳ございません。

本日のパネルディスカッションは、オンライン会議システムを利用して、オーストラリアや沖縄からも御参加いただき、吉見俊哉先生の司会の下、Tessa Morris-Suzuki先生、真喜屋力先生、チェン・ドミニク先生、岡室美奈子先生、高野明彦先生、当館の田中久徳副館長により、デジタルアーカイブの可能性やジャパンサーチに期待される役割について、

幅広い視点と背景から議論していただきました。

ジャパンサーチの楽しみ方について、いろいろな面白い使い方を御提示いただきましたし、海外を含む連携への可能性や、プロジェクト機能の活用方法の示唆もいただきました。それから、ジャパンサーチと連携することによって、それぞれで構築されているアーカイブの価値が飛躍的に高まる、そういった実例についても御紹介いただいたと思います。おかげさまで、ジャパンサーチの門出にふさわしい、すばらしいイベントにさせていただけたと思います。改めて感謝申し上げます。

ジャパンサーチは、我が国の豊かな文化資源についてのデジタルコンテンツをまとめて検索、アクセスできるポータルサイトですが、そこにとどまるものではなくて、それらのコンテンツを利活用することによって、新たに知やビジネスチャンスを創出するためのプラットフォームたることを目指しております。そのための様々な利活用機能を用意しています。

現在のところ、ジャパンサーチの認知度はまだまだです。今後、ジャパンサーチが大きく成長していくために、当館としても国のデジタルアーカイブジャパン推進委員会の活動の中で、地域のアーカイブを含めたコンテンツの拡充、ジャパンサーチの広報の強化、利活用促進に向けた活用事例の紹介や、条件が許す範囲でハッカソンのようなイベント開催といったことにも、積極的に取り組んでいく所存でございます。

本日、参加してくださった皆様におかれましても、今後、ジャパンサーチをさらに御活用いただき、利活用事例の紹介や機能改善に向けた御意見をお寄せいただくなどして、ジャパンサーチと一緒に育てていただければ幸いです。デジタルアーカイブが持っている予測不可能な生成能力をどんどん目の当たりにしたいと強く希望いたしました。

今後とも一層の御支援、御協力をお願い申し上げます。簡単ではございますが、閉会の挨拶とさせていただきます。

本日はお忙しい中、御参加いただきまして、本当にありがとうございます。（拍手）

○司会 以上をもちまして「デジタルアーカイブ産学官フォーラム」を終了させていただきます。

事務局がオンラインイベントに不慣れなところもあり、不手際がありました点、改めておわびいたします。

本日、先生方から御発表いただきました資料につきましては、許可をいただきまして、可能なものはデジタルアーカイブ産学官フォーラムのページに掲載させていただきたく存じます。

本日は、長時間にわたり御清聴いただき、誠にありがとうございました。

フォーラム終了後、ブラウザにアンケートがポップアップいたしますので、回答に御協力くださいますよう、お願いいたします。

本日は、誠にありがとうございました。

以上